

初見狩りアニメにいる
俺はどうしたらいいで
すか？

サトシ16852

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ぬきたしのような題名ですが関係ないです

主人公が傍観者するだけです

目次

他人 一話

—

—

5

1

一話

「ねえ、またニケノ冒険譚を読んで！」

6歳になる小さい子供はその美しい灰色の髪を揺らしながら暖炉の前の椅子に座つて無表情の青年に期待を込めてお願いをする

「イレイナは本当にその本が好きだな」

呆れたような顔しながらしつかりと少女の持つている本を受け取る。そして青年は膝を掌で叩き座るように促すとイレイナは青年の膝の上に乗る

「あらあら、結局読むのね。なんだかんだ言つて嬉しいのかしら？」

その光景を見ていた少女の母であるヴィクトリカは青年を揶揄うように少し大きな声で尋ねる

「そうですね、なんだかんだ言つてやつぱり嬉しいですよ。妹みたいで可愛いし」

しかし彼女の揶揄いを受け流し、少し目線を下げる

膝に乗っている少女がまだかまだか足揺らし本の朗読を待っている。そんなイレイナを見て、いつも無表情の彼の瞳からどこか少し悲しげな色が見えた

「ねえ！早く読んで！」

彼がいつまで経っても読まないことに痺れを切らしたイレイナは彼の手を掴みながら揺らす

「ごめん」

青年はイレイナの行動に促され持っている二ケの冒険譚を読み始める。何度も何度も読み聞かせてきたこの本を

そして読み終わった時、彼が持っていた本を取り上げ、イレイナは母の前に行き、言った

「私、大きくなったら二ケみたいに冒険する！」

青年から取り上げた二ケの冒険譚を母親に見せつけるようにし、自分の意思を高らかに宣言した

そんな娘の姿を見たヴィクトリカは家事の手を止めイレイナに笑顔で言った

「あら、それならまず魔法の勉強を沢山して二ケのような魔女にならなきゃね」

「たくさん勉強して魔女になったら世界中を旅していいの？」

希望に満ちた瞳で見つめるイレイナにヴィクトリカはしやがみ、目線を合わせた

「ええ、もちろんよ」

目の前で物語が始まるやりとりを見ていた

魔法の旅々という物語の主人公であるイレイナがニケの冒険譚という本を読み、外の世界の美しい光景に憧れ、旅をするために魔法になるという子どもらしいけれどとても素敵な目標

俺は魔法の旅々はアニメでしか見たことないがこの作品が大好きだった。幻想的で個性的な主人公、旅を経て成長していくイレイナ

人生でやりたいことなんて全くなかったあのうと生きてきた自分には目標に向かつて全力で取り組み、夢が叶っても腐らず前へ進むそんな主人公が好きだった

この世界にきた時は嬉しかった。大好きな物語の世界だとそれは大はしやぎした。まだ主人公であるイレイナが生まれていなかったたので母親であるヴィクトリカに会いに行った

そして彼女の旅について行き様々な旅をした

それからだった

俺以外の人間が人に見えなくなっていたのは

旅について行き、原作にある話の体験をした時、自分以外の人間がどのように動くか

プログラミングされたNPCのように見えてきた。しかし、彼らにはそれぞれの生きたエピソードがあり歴とした人間である。

彼らは生きている、それはわかっているが俺には人形のようにしか見えなかった。なぜならこの世界は人の手によって描かれた世界なのだから

作者が神様であり世界の物語が決められるのだ。この世界の人間は自分の意思で生きていると思っているが、それは間違いでありそう思わされているだけなのである

もしかしたら俺もこの世界の人間と同じ人形なのかもしれない

そのように考えるとだんだんバカらしくなってきた。人が死のうが生きようが、物語が原作通りに進もうがどうでもいい。もうこの世界はアニメで見るのではなく間近に観れる魔女の旅々である

この世界に生きる一人の人間ではなく、傍観者として生きていこう

他人

旅をするために魔女を目指すことを決めたイレイナは、家にある本から魔法を学び、そして得た知識から生まれた疑問には、本屋に行き本を買い、また生まれた疑問を本で読む。そんな日々が続いた

そして、知識だけでなく実際に魔法を自分が使う練習を始めた。彼女の才能は凄まじく、始めたばかりの魔法を初級だといえすぐにできるようになった。それを見たイレイナの両親はイレイナを褒めた

「すごいわねイレイナ、いきなり魔法が使えるなんて。あなたには魔女の才能があるわ」「すごいぞ！流石は俺達の子だ！今夜はご馳走だ！」

母はまるで自分の事のように笑顔で娘の成長と才能を、父は自慢の娘だ、とパンを食べながら大声で褒めた。そんな両親を見たイレイナは嬉しくなると同時に、自信をつけ、将来は絶対に魔女になれる。そして、魔女になって旅に行くことができる

イレイナは自身が魔女になり旅に出たらどんなに楽しいことが待っているのかを考えずにはいらなかった。知らないことを知る。その楽しさはもう知っている

本を読み、知識を蓄える楽しさを。しかし本だけでは当然わからないこともある。知

りたいことについての本がなければ知ることができない。本に書かれる事のない些細なことでも、そんなことでも知りたいと

そんな時イレイナは気づいた。喜ぶ両親の後ろにただこちらを見ている青年が

がいることを。あの少年はイレイナが生まれる前からこの家にいる居候。特に何かをするわけではなく、庭の花に水をやったり、父と紅茶とケーキを食べたりし、二ケの冒険譚をよく読んでくれた。

一体、何故家にいるのかよくわからないそんな彼。一瞬目があつたが彼は特に気にせず、紅茶を飲むためにお湯を沸かし始めた

両親に褒められるほどの魔法を使ったのに、まるでイレイナに興味を示さない。まるでそれくらいできたからって何だと、そんな様子。それがあまり面白くない。それに何故か両親は彼を特別扱いを受けているようにイレイナは感じていた

「どうですか？私こんなにも魔法を使えるんですよ」

イレイナはこの歳にして多くの魔法を使える、それも両親から物凄く褒められるほど。それに対し彼はなんの努力もせずになだ居るだけ、それだけで両親は特別扱いをするのが理解できなかつた

「すごいね」

彼は目も合わせずに火にかけたヤカンの前で座りながら言い返した。イレイナはそ

の透かした態度が気に入らず、思わずムツとしてしまう。まるで壁に語りかけているような無機質な反応だった

「あなたは恥ずかしくないんですか？ただのうのと生きて目標もなく年下の私のようなさいのうも無い。私がどれだけ頑張っているのか知っていますか？」

イレイナは気に食わなかった、少し前まで気にもしなかった彼に何故かとてもなくイライラがおさまらない

「知ってるよ、君が沢山の本を読み、親がいない時でもひたすらに勉強して炎の魔法を使って家を燃やしかけたり、将来魔女になって旅をして様々な出会いと別れ、喜びと苦しみの中で大きく成長していくのを知っている」

「？、何を言っているんですか？将来なんでものはわかるはずがないじゃないですか、頭おかしくなったんですか？というか、なんで誰もいなかったのに、火事起こしかけたこと知ってるんですか？」

返ってきた答えに困惑するイレイナは何故か喧嘩越して強気に質問をするという自分でも何がしたいのかわからないことをし始める

「少し頑張り過ぎだよ、なりたいたいことや、やりたいことの為に頑張ることはとても大切なことだけど、それをやり過ぎていつのまにか自分を追い詰めてる。少しくらい肩の力を抜いて休憩でもしたほうが良い」

しかし彼はこちらの質問には答えず一方的に語りかけ、それでいてものごとをしつかりとわかっている。イレイナは彼の話を聞き、自分がいつのまにか追い込まれてむしやくしやしていたことに気づいて己のやっていたことは八つ当たりで過ぎないことを理解した

「、なんとというか、その、すいません」

客観的に見ればいきなり喧嘩をふっかけたこちらが悪い、そう思ったイレイナは気まぐすそうに誤った

すると彼はお湯の沸いたヤカンを手に取り紅茶を淹れ、イレイナに差し出した

「良い子でいようとすると疲れる、真面目だと生きづらい、そのうちやりたく無いことだつてやれと言われる。けれど別に嫌だつたらやらなくて良い、いつか君に素直になれと言つてくれる人が現れるさ」

イレイナは彼とこんなにも話をしたのは初めてだった。少しズレた事を喋るが何故か引き込まれるような魅力がある。ものごとを客観的に見て、一人の人間を物語の登場人物のように見ているかのようなそんな感覚を覚えた

「ということがあつたんですよフラン先生」

魔女であるフラン先生から最終試練を終え、別れの時

自分が耐えればいいと思わず、気に食わないことがあるなら戦つて、嫌なことは嫌と言えようになれと言われた私は昔の出来事を思い出してフラン先生に話した

「あの人たまに未来が見えてるんじゃないかって思う時があるんですよ。あの時も多分、少し前の私みたいに我慢して頑張つてたんだと思うんです。あの時に言われたことが今ようやくわかった気がします」

そう、あの時はまだ物事を理解するには幼過ぎたのだ

「そうですか、てつきり私がイレイナの一番だと思つたのですが」

「残念ですねフラン先生、彼が私の一番だつたようです」

冗談には冗談で返します。自分に正直になり、ありのままの自分を人に曝け出し語り合う少し成長を感じると共にこの世界の素晴らしさを実感する

「フラン先生、私の旅に彼を連れて行くこうと思うんです。二ヶの冒険譚で二ヶが弟子を連れてように彼を私の弟子として連れて旅をしたいんです」

「そうですか、お話によると少し変わった人のようですが、大丈夫ですかイレイナ？」
何か少し真面目な雰囲気を出しながら訪ねてくる先生

「大丈夫ですよ、なんというかあの人はこの世界を客観的に見ているというか冷めている目で見ているんです。それが私は気に入りませんだから彼はこの世界の素晴らしさを私の旅を通して感じさせます。つと話し過ぎましたね、それでは先生今までお世話になりました」

「ええ、あなたの旅が良い物であると私は応援しています、それでは」
箒に乗り段々と遠くなっていく先生の背中を見えなくなるまで見送る

弟子と別れ話に出てきた男の話を思い出す

「彼は変わっていないようですね」

昔、共に旅をした彼を思い出す。最初はまるで世界の全てのもものが輝いているような目ではしやぎ楽しそうにしていた彼は段々と反応が無くなり見るもの全てがつまらないものとなってしまった

何が彼をそうしたのかはわからないが弟子であるイレイナが彼を変えてくれることを祈り王立セラステリア箒を向ける